

IV. 障害別コミュニケーション

1. 聴覚障害のある人とのコミュニケーション

聴覚障害の原因として、聴覚組織の奇形や、妊娠中のウイルス感染(特に風疹)などで聴覚系統がおかされた場合(先天的)、突発性疾患、薬の副作用、頭部外傷、騒音、高齢化などによって聴覚組織に損傷を受けた場合(後天的)に分けられます。

聴力レベル	程度	聴こえの状況
26～40 dB	Mild : 軽度	小さな声、遠くの声、顔が見えない場合などに困難が発生する
41～55 dB	Moderate : 中等度	普通の話声が聞き取りにくい
56～70 dB	Moderately severe : 準重度	大きな声の会話なら理解できるが、集団で話合いなどは相当に困難
71～90 dB	Severe : 重度	耳元 30 cmの大きな声は聞こえ、環境音や母音のいくつかは区別ができる程度
91 dB以上	Profound: 最重度	補聴器などの特別な手段を講じなければ音声言語情報の聞き取りはかなり困難

【難聴の種類】

種類	特徴	原因
伝音性難聴	外耳、中耳の障害による難聴空気振動が十分に伝わらない状態だが、小さな音が聞こえにくくだけで、言葉の明瞭さにはあまり影響はない状態	耳垢栓塞、中耳の炎症、耳小骨の異常など
感音性難聴	内耳、聴神経、脳の障害による難聴「音が聞こえにくい」だけでなく、音がゆがんだり響いたり、言葉がはっきり聞こえない状態	先天性：遺伝性、妊娠中の事故、母体の感染、内分泌異常、仮死未熟児、重症黄疸 後天性：ウイルス感染、薬物障害、騒音性難聴、頭部外傷、血行障害
混合性難聴	伝音性難聴と感音性難聴の両方の原因をもつ難聴	原因不明が多く、診断が難しい
後迷路性難聴	感音性難聴で、特に蝸牛神経-脳の障害による難聴	

【聴覚障害者の不便さ】

<p>周囲の方に気づいてもらえないことがある</p>	<p>聴覚障害は、一見してその障害がわかりません。特に言語障害は、知りたいことを質問できない不便さを理解されず、日常生活にさほど不自由しないと思われがちです。そのため周囲の方に気づいてもらえないばかりか、心ない言葉を受けることもあります。</p>
<p>放送や呼びかけにも気づかないことがある</p>	<p>放送による呼び出しや声をかけることでは通じない場合があり、銀行や病院などで不在だと思われることもあります。また店内放送や駅の構内放送などにも気づかずに、適切な行動がとれないこともあります。</p>
<p>音によって周囲の状況を判断できない場合がある</p>	<p>日常生活の中で、音などから周囲の状況を判断できない場合があるため、事故や事件が起こったとしても、どうすればいいのかわからないことがあります。そのため不自由を感じるだけでなく、危険な目にあうことも多いようです。</p>
<p>コミュニケーションの方法を間違われることがある</p>	<p>聴覚障害者には、手話や筆談など、その方なりのコミュニケーションの方法があります。コミュニケーションの方法が適切でないと、話を伝えることができません。その方に合ったコミュニケーションの方法をまず理解することが大切です</p>

【聴覚障害者のコミュニケーション手段】

補聴器、人工内耳、補聴援助システム(磁気誘導ループ・赤外線補聴援助システム・FM補聴システム)等

◆視覚から得る情報

手話・指文字、読話(読唇)、筆談、要約筆記 等

◆マスメディアから得る情報

字幕、電光掲示板 等



補聴器の電池は2週間くらいでなくなります。電池の有無に気をつけましょう。

西東京市暮らしヘルパー養成研修

高齢者とのコミュニケーション

**発行／平成28年11月1日 西東京市
令和4年2月1日 第5刷発行
初版作成／ヒューマンライフケア株式会社**

無断転載・複製禁止